

Title	ケンブリッジ大学中央図書館蔵『末ひろかり』解題・翻刻
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	三田國文 No.54 (2011. 12) ,p.77- 88
JaLC DOI	10.14991/002.20111200-0077
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20111200-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20111200-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ケンブリッジ大学中央図書館蔵

## 『末ひろかり』解題・翻刻

辻 英子

絵巻一軸。書架番号 (EJ.100.23) 寛文から元禄頃の写か。

縦三三・〇×全長一〇七四・〇糎。表紙は、綾形文の緑地に草花文様を織り出した錦地。左肩に題簽(金紙縦一六・二×横三・四糎)に「末ひろかり」と記す。見返し(縦三三・〇×横二五・六糎)は金紙、象牙軸。鶯色の平打紐が付いている。料紙の詞部分は上質の鳥の子紙で、金箔をおく。挿絵は全六図。本文、ルビともにまま濁点が付されている。漢字は通用字体に改めたが、「禮」第17紙9行/17・14/21・1、「礼」第17紙10行等は原文のままとした。掲載申請許可二〇一〇年十二月十九日取得。

### ケンブリッジ大学所蔵『末ひろかり』詞書

つたへ聞もろこしの岷江みんがうのみなもとをた  
つぬれはなかれの水わづかにさかつきを  
うかふるほと浅瀬あさせなれともそのすゑに  
をよひては大なる江えとなり底そこふかく波  
たかうしてもし風すこしあらければ  
舟をいだしわたる事かなひかたしとかや

松せうしの一粒りゅうはそのかたち小ちひけれとも地に  
落おちて生なま長ながすれば根ねはびこり枝えだしげり

四方にたれしきてすゑなかくその大木

となる時には山にひろこり谷にふさかり

木きすゑは蒼天そうてんの雲をしのぎ風のひゝき

とをくつたへていく千丈せんじやうともしりかたし

山はちりひちのかさなりつむにおこり

海うみは苔こけの露つゆしたゝりあつまるになれ

りといふ事ことはみなこうをかさね年としを (第1紙)

つもりてやうやく小より大にいたり浅あき

よりふかきにをよへり鶴つるの卵たまごのわつか

なる日をかさねてひなとなりつはさす

てにそなはるときは雲漢うんかんの空に羽はつち

なくこゑ九くかうに聞えとふに追事おひごとあた

はすとゝむるにいくるみのをよふところに

あらず小蛇せうじやはじめはつま櫛くしのことくなれ

とも年久せうじゆしくつもりぬれば其身み大に

うろこかさなり地にわたかまれば山の

ことく時いたつて龍となりいきほひにのりては雲をおこし雨をくだし九天のほるにをよひてひぎやう自在を得て日のひかりをおほふ物みな時を得ればすゑひろこりていきほひあり後にさかへてめてきたためしなくまことにこれおほしかの黄楊木のひとせにわつかに一寸を長じて閏のある年には又一寸しゝまると云かゝるたくひは物のほしめには見聞たに心うし人のつとむる字の道も黄楊の木にならふ事なかれとこそいましめられけれ

〔絵一〕 (第3紙)

(第2紙)

されは世の人の年のほしめをいはふよりしてかすくめてきたためしとて物によせ名によせてよはひをのへ命をのふ君かよはひはいつまでもかはらてくる若水や又春日野の雪まをわけ出てつむらんはつ若な子日の小松引うへて千とせの春のはしめとて色もときはのわかみとり枝にはすたつひな鶴のすむといふなるほうらいの山のいはねはうこきなき国ゆたかなるためしとかや数もしられぬ君か代の久しきかけをち尋ある竹のそのふのすゑかけてななきちきりは玉つはき千世に八千世にいつ

までもたえずむすへる柳の糸くり返してやさほひめのをりてさらせる朝ことのかすみの衣うす氷とくる御池にゐる龜のよろつ世かけてかきりなき浜のまさこのかすくにくれる玉のさかつき

(第4紙)

にかけをたゝへてくむ酒のくすりとなりて君か世をたもつよはひは久かたの天津御そらとあらかねの地と草木のあらんかきりつきすましきそのためしにめてたき事をいはふ也下部のなにかしか神前に申せし祝言にもよはひは松と竹ことふきは鶴とかめ海老のこしかこふて鱒のますくんに錢はつなきながら綿はたばねながら鯛のたいらかに家さかへましませとよみたてまつり祈念申せし事も人の世の中物みなあやかる事なきにあらすよき事にはあやかるとへし麻の中のえもきはあさにあやかりて

麻のことし (第5紙)

〔絵二〕 (第6紙)

しかるに今の世にもすゑひろかりとめてたき名によそへつゝいはふへき所にはゆく人もこれをもち又たてまつる事もあり此日本につくりいたしてもはやすそのたくみ地紙はこれ半月な

りほねの数十二本を十二月にたとへ

たりふたつのかなめは日月をあらはせ

りひらくときは風すしく夏のあつ

さをわするへし立てまひをまふときは

これやむかしの神あそひあまつ空なる

乙女の袖さなからこゝにうつすとかやたゝ

めは又すゑひろく礼をたすくるとり物

なりうこくに風を生ずれば人のあつさを

とゝむるはこれ仁の徳なり廉目のかた

たちてほねのみたるゝ事なきはず

なほち義をまもるなり節会いはひの

おりからにしやうぞくを引つくろひ又は

貴人のまへにはかならずもちてしこうす

るこれ礼の徳なりひらけはひらきたゝ

めはたゝむ開合こゝろのまゝなるはこれ

智の徳にあらざやあふけはかならず風

を生すこの事さらにたかはさるはこれ信

の徳なりいくさにむかふて敵をまねき

せうふのしるしをあらはすはこれ武勇

のならずや五常の道たゝしく智仁勇

の三徳たゝこのひとつの扇にそなふむかし

たんの国さえきの郡に佐伯の宿禰

豊磨といふ者あり生れてよりこのかたそ  
の心つねにさはがしきをきらひしつか  
なる所をこのみおりくは山ふかくいりて笙

をふきて心をたのしみけりされはその

こゑ呂律にかなひけるにや嶺の猿は木の

みをもとめてこれをさゝけ岩かけにかく

れすむさおしかのたぐひむしなうさぎ

にいたるまでしたしみなれてあつまりき

く雉山鳥のたぐひは木すゑにあつま

りてこれを聞けりまことにもろこし

の伯牙といふもの琴をひきしには水にす

むうろくつをとり鄒燕といふもの笙を

吹しには寒谷あたゝかに春のことくあり

ければまだ冬ながら梅さくらの色をあら

そふ花咲けりそれはもろこしいにしへ

のためしこれは我てうの

豊丸音律に  
達せしゆへ  
ぞかし

〔絵三〕 (第10紙) (第9紙)

かくて豊丸日ごとに山に入笙をふきて

たのしみとすをのつから仙境の道にいた

り身もかるく心もすみわたりいよく

山をこのみてさらに人里をはずみうきも

のにおもひけるほとにこの心さしにひかれ

て猶山ふかく分りたりければひとつの園

に行いたりぬ園のなみ木を見わたせば春

のけしきそのとかなる霞の衣たちわた

り谷のうくひすのきちかく梅かさえだ  
につたひてはさへつるこゑも聞ゆなり  
池の氷もとけそめてきしの柳の糸

たれて松にかゝれるむらさきの藤もや春  
のなこりとてかこちかほにも花咲らん

井出の山吹色ふかくみなみにつく夏  
の空立石やり水なかれては落くる滝

の音をそへみきはにさけるかきつはた御  
はしのもととせうひの花ほころひそめ

て匂ふらん垣ねに白くみえわた渡る卵の  
はなのよそほひは月か雪かとあやまたる

雲井に名のるほとゝきすあやめみたるゝ  
沼の水こめてふりそふ五月雨にむかし

をしふ花櫛にほひや聞にかよふらん沢  
辺のほたるみたれてはなれもおもひに

身をこかしきえぬ火をもやうらむらん  
こすゑにたかく鳴蟬のいのちを露

にかけなからもぬけてゆくも心あり西  
より秋の風落て露をきそふる萩か花ち

きりはくちじをみなへし何をうらみに  
くねるらんまかきに菊のはなさきて窓

のみみち葉うすくこくそむる時雨の音  
すこく妻こふ鹿のこゑく虫のうらみ

もたえくによはり行こそあはれなれ  
木すゑに冬の色みえて北よりさそふあらし

(第11紙)

の音木の葉やつれてふる時雨こととふ  
みちをうつみつゝかれ野のすゝき霜さえ

て雪のしたなる谷川もいとゝたえく  
こゑむせて嶺ふくあらしはけしきに

羽かひをかはず鴨鳥のをしねの夢や  
さますらん寛の水もつらゝゐてさひし(第12紙)

き空によこをるゝ炭かまのけふりのす  
ゑげに冬なれやと心ほそしなをふかく

たちいりてあるしのすみかをさしのそ  
けは柴のとほそ竹のかきさもあやし

けにみえけるか内には年ころ七十はかり  
のおきな二人さしむかふて心しつかに

葉をとゝのへてこかねの釜にてねるとみ  
えしとよ丸をみつつけていかにあれば何の

ゆへにか爰には来れるそとふとよ丸  
こたへていふやう我はたんはの国さえぎの

こほりのものなるか世のさはかしきをさら  
ひてしつかなる所をこのみ是までさまよ

ひ来り侍へり爰は聞ゆる仙境とおほえた  
りねかはくはそれかしにも仙じゆつをさ

つけ給へと申けりおきなうち聞てさらは  
こなたへ来るへしとて内にいさなひれつゝ

まつ一りうの葉をあたへ侍へり豊丸これ  
をふくするにそのあちはひ心もことはも

及はれす心のうちたちまちにすゝやかに

おほえてとひ立はかりになりけりおき  
な申されけるやうは仙家の道術さまく  
なりいまはなんちにつたふへしこの法  
をたもちぬれはまつ地仙となるへし  
それより徳をほとこしますく道を

おこなへはつゝに天仙となるへきなり  
とくく故郷にかへりて人をめくみ徳を  
おさめ身をつしみ心をとのへ天仙と  
なり給へとて鋒雪玄霜の煉丹長生  
のくすりを五色のつほにうつしいれて  
豊丸にあたへつゝ谷のほとりにをくり  
出ればあとはすなはち雲かすみけふり  
の色にうつもれて仙家の四季のよそほひ  
はへたゝりてみえさりけりをくりて出し  
おきなも雲ちをかけりて帰り

にけり

きたい

ふしき

の事

とも

なり (第14紙)

(絵四) (第15紙)

さるほとに豊丸は故郷にかへり妻子けんそく  
をよひあつめてかたりけるは我すてに仙  
家にいたりまのあたり長生のみちをうけ

て地仙のかすにくはゝり侍へりなんちらも

これをつたへて我家をおこすへしとてき

まくの方術をほとこしをしへたり又

豊丸あるひ山中にりて心をすまし筈

をふくところにかしこにひとつの洞ありて

朝なく雲をおこすしかるにこのほらそ

のふかき事ほとりをしらす豊丸洞ちか

く岩のうへに座をしめ筈をふく其こゑ

空にひき地にみつれば山中の鳥けた

ものことくあつまりて耳をかたふけつば

さをたれかうへをうなたれひつめををりこ

れを聞こそぎとくなれかゝりしまゝに

ほらの内に年へにけりとおほえて色

白き蝙蝠数千百とひ出たり仙家の書を

あんするにかうもりむまれて千ざいを

すくれはその色へんじて白しこれを取 (第16紙)

て食すれば長生の身となるその大さかさ

さきのことしといへり此書の内にしるしたる

ことはにたかはす大さかさきのことく

その色しろきかうもり数千百とひ出

て木にとまり岩かとかゝりてつば

さをのへ又はたみ筈をきくとおほえ

たり豊丸つらくこれをみるに心つく

事あり公卿殿上人真の束帯し給ふには

笏をとりて禮をおこなふ又地下のとも

からもこれをとりにて礼をたすくもろこし  
のくしゆんのつくり給へる五明の扇をも  
ろこし人は手にもちて公卿臣下の其外は  
笏にかへてこれをとれり又団扇のうち  
わと云はこれさらに禮のみちにそなへかたし  
我てうに又たくみなからんやかたちを

五明によせたくみをこのかうもりのつ  
ばさよせて笏にかへて礼のうつはもの  
にそなへむとすゑひろかりの扇を此とき  
たくみ出しけりそのときのみかとは天

智天皇とそ申けるたんはの国朝倉の  
の宮に木の丸殿をたてられこゝにすま  
せ給ひけりされは天皇の御歌に

朝くらや木のまるとのに我すめは

名のりをしつゝゆくは誰が子ぞ  
と詠せさせ給ふ豊丸すゑひろの扇を  
たくみいたして子細をつふさにそうもん  
して扇をさゝけたてまつるみかたとえ  
いかんのあまり豊丸を新中納言に補  
せられけれ共もとより世の中のさはがし  
きをいとひて身は山すみの人となり長  
生の道をおこなふゆへに官位をはじた  
いして地仙となり侍へりつゝ石すいをと  
り雲母をくらひつゝに天仙のみちを  
さとり空をかけり雲をわけ飛行じさ

いをほどこし

妻子にもろくの

薬方をつたへつゝ  
みつから仙宮に

入に

けり (第18紙)

〔絵五〕 (第19紙)

さるほとに豊丸か子すなはち佐伯の郡  
を給はり父かたくみをえいかんありそ  
の名をすくにつけられてさえきの中  
将季廣とそくたされける仙術をぢき  
につたへ長生不死の薬をねりてみかと  
にこれを奉りければ君きこしめさるゝ  
に御よはひわかやかにきよくだいちら  
すくやかにおはしますこそめてたけれ  
みかといいかんあさからす中將をめされ  
て施薬院にをかせ給ひ典薬の頭に  
なされたり和家丹波二流のうち丹波氏  
の典薬はこの時よりは生まれりすゑひろ  
子ともあまた出来てくらゐにすゝみ官  
にいたり諸国にひろこり名をあらはし君  
をしゆこしたてまつるこれより諸こくに  
ひろまりてすゑひろの扇とて仙家の  
たくみいはれありて此あふぎの徳たかく  
よはひをのふる松の風あふげはこゝも仙境

のすみかにかはることもなしおさむる手には  
 禮をとへのへ寿福のふたつをこめたれ  
 はすゑひろかりていつまでもさかえ久  
 しき扇とかやもとより年をつみこうを  
 かさねてすゑ久しくさかへさかふるその  
 ためしは鳥けたもの草や木にためし  
 なきにはあらね共この扇の一徳にはくら  
 へてすぐる事そなき手にとるからに  
 すゝしむる神の心も舞姫の袖かへすに  
 やいさむらんあふげは内より吹いたす風  
 ものとかに四方のうみなみしつかなる  
 松かえもならさぬ御代のしるしとていはふ  
 心のすゑひろき君のめくみは久かたの月の  
 みやこのもてあそひ扇合せのたはふれも  
 たゝすゑひろの徳とかやされはあふきの  
 そのかたちをめにみるからにめてたくも  
 あやからせおはしまして

すゑひろかりてつき

せぬや君か御代

にてしられ

たり (第21紙)

〔絵六〕 (第22紙)

### 翻刻ならびに解題について

二〇一〇年九月九日に本作品の調査の機会を得た。絵巻の保

存箱の中に、「転写ならびに解題について」と題し、一九七八年七月、石井美樹子と記す直筆の原稿がある。未公開のまま今日に至っているようなので、本来なら先行研究として、ご了承をいただいたうえ掲載させていただくところであるがその術もないので、同氏による解説を私に抄出し、解説に替える。

絵は極彩色で、土佐派の系統にあるように見える。(略)  
 特に第二段絵(一)では、九天にのぼるいきおいの竜をびつくりして見ている五人の百姓の表情はその身振りともども見る者を絵巻の世界に誘い込むに十分な魅力と生命力とをたたえている。

内容は豊丸という笙の名人が山深く分け入り仙境に至り、不老不死の薬を仙人に与えられて帰り、人々にそれをほどこし家をおこす。またある日洞窟に数千の白蝙蝠が飛び交うのを見て、唐の五月の扇を改良してすゑひろがりの扇を考案し、天智天皇に奉る。そのため官位を授けられるが、豊丸はそれを辞退して、長生の道を行うため山に入り、ついに地仙の道をさとする。豊丸の子孫は天皇より代々長生不死の薬をほどこし伝える典薬の守に任じられ、その家は栄えたという扇の起源を説いた祝儀物語の一つ。

太田武夫校訂『室町時代物語集 第五』(東京大岡山書店昭和十七年)に横山重氏が、氏の所蔵する絵巻「すゑひろ物語」(外題も内題もないため書名は横山氏が付したものを転写・解説しているが、そこで、「また他に類本のあることを聞かないものである」(六一九頁)としているので、この度ケンブリッジ大学にその類本が発見されたというこ



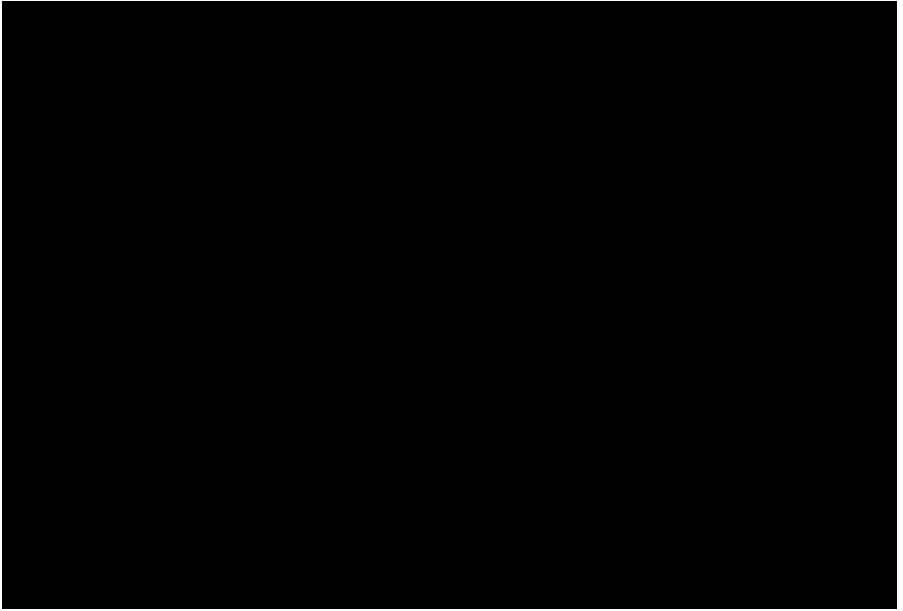
とになる。

- とある。「室町時代物語集第五」に収められた横山旧蔵本の翻刻は、『室町時代物語大成 第七』（昭和五十六年再版）に「すゑひろ物語」（仮題）として再録されている。本文には若干の異同が見られる。ケンブリッジ大学本を軸として、カッコ内に「大成本」（赤木文庫旧蔵）を記すと以下ようになる。
- ・ 雨をくだし九天（以下十六字衍カ）にのぼるにをよひて（〜雨（以下十六字衍カ）をくだし、九天にのぼるにをよひて、）（第2紙11・12行）
  - ・ これ武勇（以下）の（〜徳（以下））ならずや（第8紙5・5行）
  - ・ 白くみえわた渡（以下）（ナシ）る卯（以下）のはな（第11紙18・19行）
  - ・ こゑむせて（〜び（以下））（第12紙18行）
  - ・ たんはの国（〜さかへ（以下））（第13紙10行）
  - ・ 雲（以下）ち（以下）に（以下）を（以下）か（以下）けて（以下）帰（以下）りに（以下）け（以下）り（以下）き（以下）たい（以下）ふ（以下）し（以下）き（以下）の（以下）事（以下）とも（以下）なり（十二字ナシ）（第14紙1〜20行）
  - ・ の（以下）（ナシ）宮（以下）に（第18紙1行）
  - ・ えい（以下）か（以下）ん（以下）の（以下）あ（以下）ま（以下）り（〜に）（第18紙7・8行）

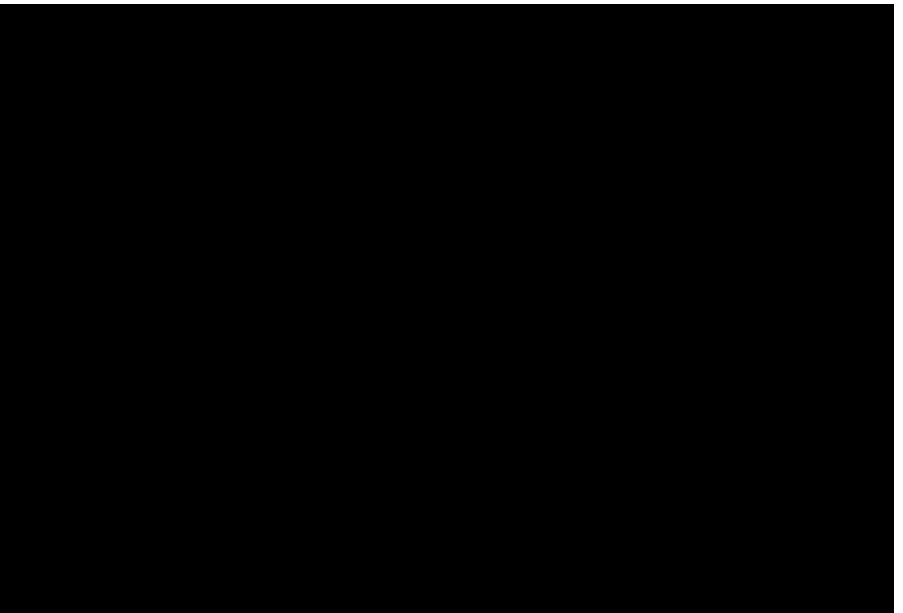
（付記）

本稿は平成22〜24年度科学研究費補助金（課題番号2252192）による研究成果の一部である。

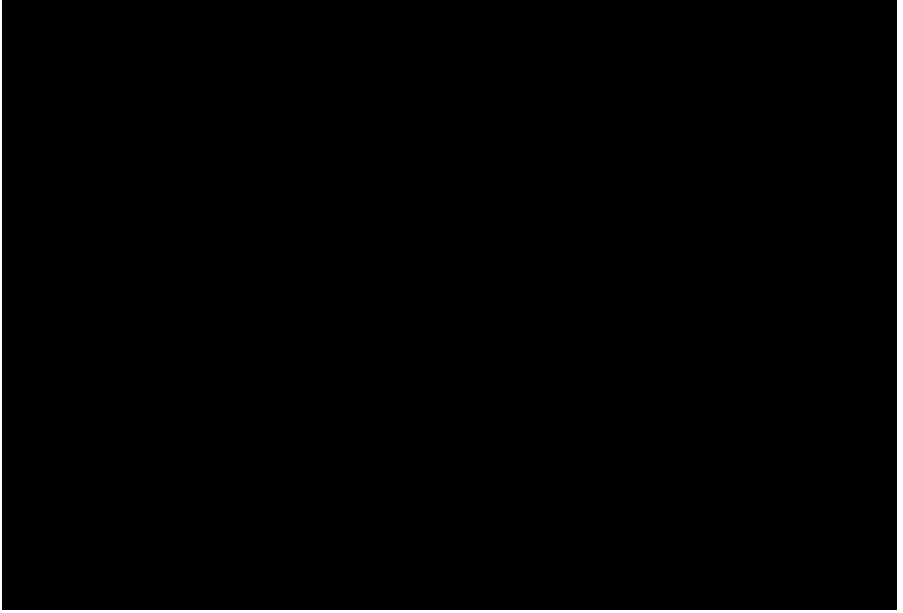
（絵一）



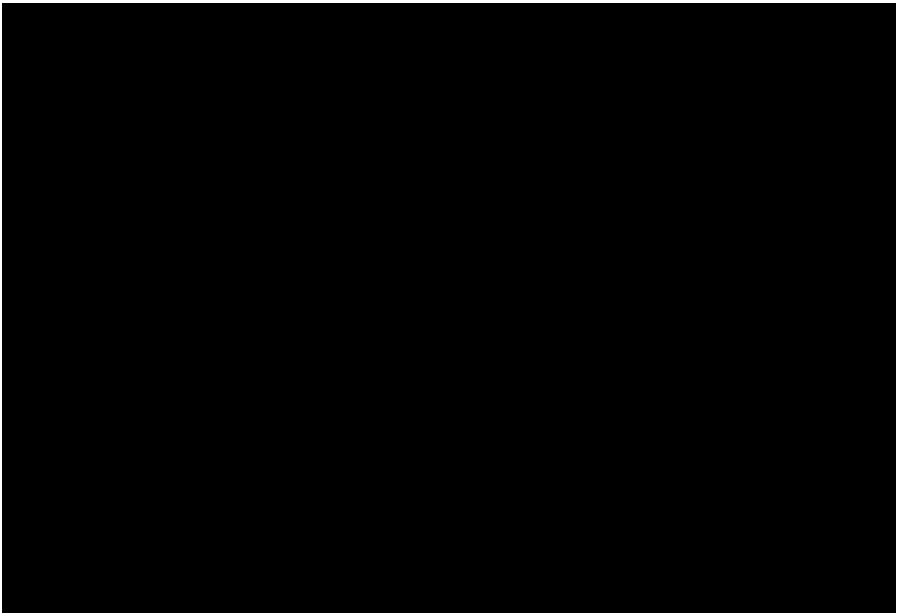
(絵二)



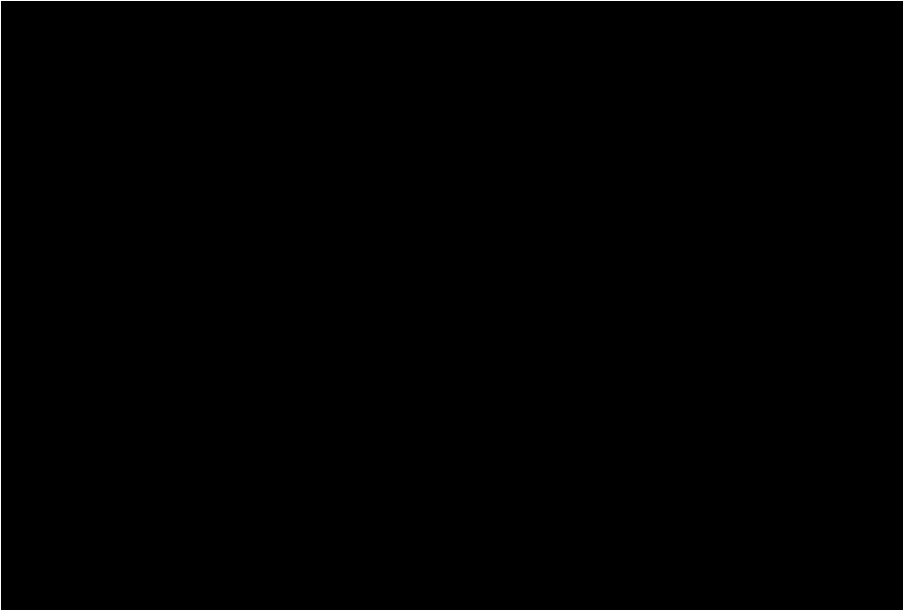
(絵二②)



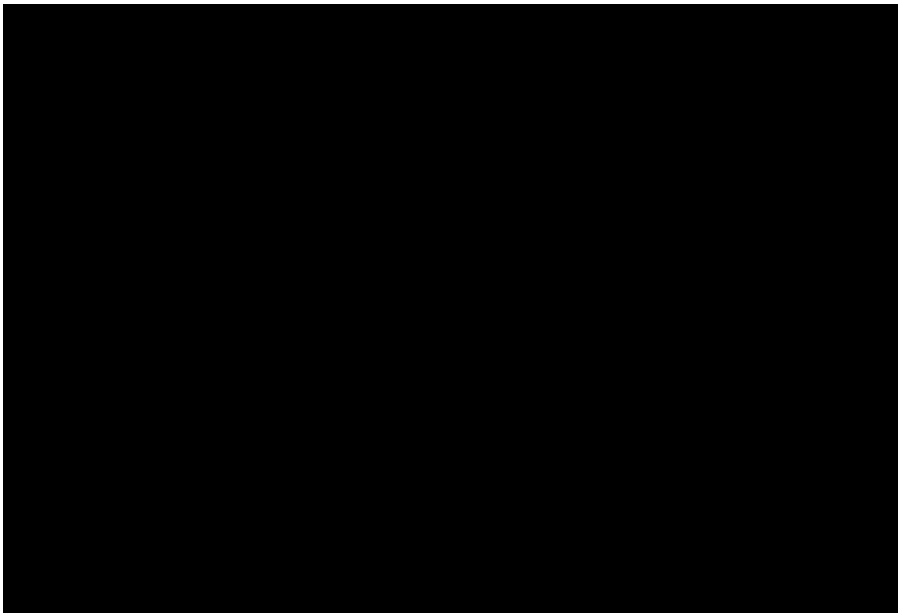
(絵三)



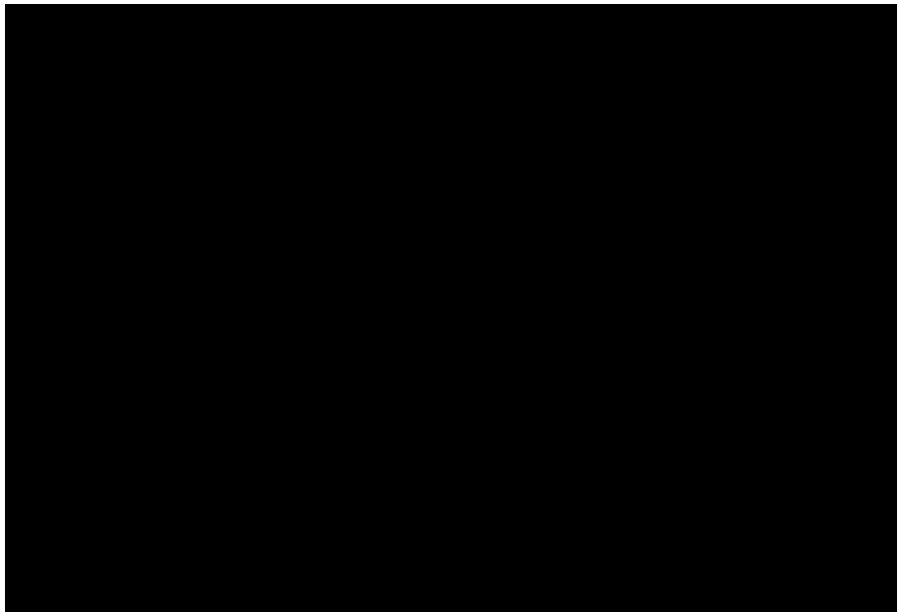
(絵四)



(繪四②)



(繪五)



(絵六)

『末ひろかり』

縦 33.0糎

ケンブリッジ中央図書館所蔵

書函番号 FJ. 100.23

紙数	横(糎)	幅(糎)	詞(行)
第1紙	47.5		15
第2紙	48.6		20
第3紙	50.3	絵一	
第4紙	47.0		19
第5紙	31.2		13
第6紙	50.6	絵二	
第7紙	47.2		19
第8紙	50.4		20
第9紙	17.5		7
第10紙	49.8	絵三	
第11紙	47.9		19
第12紙	50.4		20
第13紙	49.6		20
第14紙	49.8		20
第15紙	93.0	絵四	
第16紙	47.6		19
第17紙	49.6		20
第18紙	48.6		20
第19紙	50.6	絵五	
第20紙	47.8		19
第21紙	49.0		20
第22紙	50.0	絵六	
計	1,074.0		290
見返し	25.6	軸付紙	0.0